人文・自然・人間科学研究　No. 51, pp. 33-52　　March 2024

旧制中学校に勤務した外国人英語講師による日本研究の類型化の試み

── 西日本地方勤務経験者を対象として ──

保　坂　芳　男

Native English Teachers at Pre-war Middle Schools and their Japanese Studies:

Focusing on the western Japan region

Yoshio HOSAKA

要　旨

筆者は戦前の旧制中学校の外国人講師に関する研究を行っている。その主な研究目的は，外国人講師に関しては，日本の中学生に教えた後の講師本人のキャリア形成を明らかにすることである。

本研究では，戦前の中学校で外国人英語講師として働いた経験をもとに，その後日本文化等に興味関心を抱き，日本研究者になった例を紹介したいと考えている。筆者のこれまでの研究から予想以上にそういった外国人講師は多いと判断し，紙面の都合上今回は表題の通り，西日本の中学校に勤務した経験のある外国人講師 7 人を研究対象とすることにした。

来日の経緯，在日年数，日本研究の分野の三点から分析を行い以下のような結果となった。

① YMCA による派遣がきっかけで日本に興味を持ち日本研究を始めることになった外国人英語講師がいる。

② 日本研究者のほとんどは，10 年以上の滞在である。

③ 外国人英語講師にとって興味関心の中心は，日本文学や仏教等の宗教である。

キーワード：英語教育史，旧制中学校，外国人英語講師，知日家，西日本地方勤務

1. はじめに

筆者は戦前の旧制中学校の外国人英語講師に関する研究を行っている（保坂，2012, 2014 ほか多数）。その主な研究目的は，外国人講師に関しては，日本の中学生に教えた後の講師本人のキャリア形成を明らかにすることである。一方で，多感な 10 代に当時は珍しい外国人講師に教えてもらった日本人生徒のその後のキャリア形成を明らかにす

ることにもある。

1890（明治 33）年に島根県尋常中学校（後の松江北高等学校）に赴任した L. Hearn（1850-1904）は，日本人と結婚し後に日本に帰化した。その後，日本文化の研究者としての地位をなした。いわゆる小泉八雲として活躍し多くの著作を残し，未だに八雲研究会[(1)] 等で研究対象として歴史的に評価が高いが，筆者は，そういった外国人英語講師の例は極めて例外的であると考えている。

しかしながら，数多くの外国人英語講師の中で日本での英語教授を経験し後に日本研究者になった講師を，筆者の研究の途上でいくつか目にしているのも事実である[(2)]。本研究では，戦前の中学校で外国人英語講師として働いた経験をもとに，その後日本文化等に興味・関心を抱き，日本研究者になった例を紹介したいと考えている。筆者のこれまでの研究から予想以上にそういった外国人英語講師は多いと判断し，紙面の都合上今回は表題の通り，一度は西日本の中学校に勤務した経験のある外国人英語講師を研究対象とすることにする[(3)]。そして中学校での勤務経験をもとに，その後の日本文化等に一層興味・関心を抱き，日本研究者になった講師の類型化を試みてみたい。

西日本の定義は分野（気象学や地質学等）によって若干の差がみられるが，本研究では，『コンサイス日本地名辞典』（第 3 版）の定義「富山・岐阜・愛知 3 県以西の地」を採用することにした。

2. 旧制中学校の外国人英語講師研究の難しさについて

保坂（2022）は，戦前の中学校に勤務した外国人英語講師の研究が希薄な原因として以下の点を挙げている。

⑴　殆どの中学校では，外国人英語講師は正規の教員ではなく嘱託として扱われており，史料が残っていなかったり，不正確であったりする場合が多い。

⑵　彼らの多くが，英語教授の為に来日したというよりもむしろ布教目的で来日している。そのついでに近くの中学校から頼まれて英会話を教えるなどしていた。

⑶　受験に関係がないので息抜きの授業であり生徒の回想に残らなかったりした場合が多かった。

上記の理由から，史料が残されていなかったり，せっかく残されていてもその史料が不正確であったりする場合が少なくない。一方で，日本での英語教授が縁で日本が好きになり，長期滞在し，その中には L. Hearn のように日本研究を志すものも少なからずいたと思われる。

3. 中学校の外国人英語講師の採用に関して

明治 19 年の文部大臣，森有礼による中学校令で戦前の中学校制度の基盤が整理された。その当時は原則，各府県尋常中学校は一校とされた。その当時から外国人英語講師の採用は行われていた。ただ，全体の把握は極めて困難（中村，1964, p. 68）であるが，全国的な傾向としては梅渓（2010）が詳しい。当時の情勢が分かりやすい例の一つとして，戦前は教育県と言われていた山口県の外国人英語講師制度の例を紹介したい。

山口県の特徴は 5 つの中学校の教育条件が均等化されたことにあった。外国人英語講師の採用に関しては，山口県では明治の前半では各中学校は独自に外国人英語講師を採用していたが，そこでの英語教育における効果が確認できて以来，明治 34 年からは県費で 5 つの中学校全部に外国人英語講師を採用することになった（保坂，2017）。多くは近くの教会の牧師に頼りながら一部は YMCA による派遣講師を採用しながら大正 6 年まで全県で 5 つの中学校全部に外国人英語講師を採用してきた。その詳細は，保坂（2017）に詳しい。

大正 7 年の県議会で議論の末，外国人英語講師の採用を以下の 4 つの理由で止めることになった（保坂，2012, p. 34）。

① 外国人英語講師の学力不足

② 英文を研究している日本人教師の方が（進学指導に）優れている。

③ 中学生の読書量（英語の読解力）が不足している。

④ 経費削減

4. 知日家研究について

日本研究を行った外国人の包括的な研究としては新堀（1984, 1896）が嚆矢であるようである。新堀は，彼らを包括的な意味で「知日家」と名づけて意欲的な研究を行った。

新堀（1986）は「知日家」を研究対象としており，まず「知日家」の定義付けを丁寧に行っている。その中で特に本人の日本に対する知識の深浅，影響力の大小に焦点を当てて四類型に分類（pp. 15-16）している。本研究においてもそれぞれの外国人英語講師の日本研究者としての評価を新堀の基準を参考に行いたいと考えている。

また，新堀（1984）は，「彼らがどのようにして「知日家」になったかなどという研究は皆無である」（p. ii）と述べ，さらに「「知日家」についてはほとんど知られていない」（p. ii）とも述べて当研究の意義を強調している。

なお，本研究との関連でいえば，新堀（1984）には，Otis Cary（1921-2006）（p. 54）

の個所でわずかな言及があるだけである。また，新堀（1984）に L. Hearn が掲載されていないのは不思議ではあるが，「未だ未紹介のものも多数あり，脱落しているものもあるよう」（梅渓，2010, p. 506）と考えられる。

5. 西日本の中学校に勤務した外国人英語講師と日本研究

本研究では，西日本の中学校に勤務した経験のある外国人英語講師 7 人に関して，①略歴，②中学校での勤務，③日本研究，④「知日家」としての評価の 4 つの項目に分けて述べる。なお，紹介の順は新堀（1984）に倣って苗字のアルファベット順とする。

⑴ Clarence Ludlow Brownell（1864–1928）

① 略　歴

Brownell の経歴は，最初に赴任した富山県尋常中学校の百年史（『富中富高百年史』, pp. 73–76）が詳しい。なお，イギリス帰国後の経歴は，高成（2004）を補足として追加させて頂いた。

表 1　Brownell の経歴

1864 年	コネチカット州ハートフォード生れ。
1879 年	グラマースクール卒
1882 年	スタンフォード兵学校卒
1883 年	ニューヨーク私立学舎修学 ニュージャージー州スチーブンインステチュート修学
1886 年	ハーバード大英文学専攻，来日（世界歴訪の旅の途中）
1887(明治20)年	東京専門学校に勤務（～87 年 7 月までの 7 月間）(4)
1888 年11月	富山県尋常中学校に勤務（1890 年 3 月 31 日解任）
1890 年 9 月	福井県尋常中学校に勤務（1891 年 3 月解任）
1891(明治 24)年 3 月	東京に戻る。
1892(明治 25)年	日本を離れる。
1900 年～1902 年	大英博物館にも勤務
1903 年	渡米，サンフランシスコの副編集長 デイトンラテン語学校校長
1927 年	フロリダ州ジャクソンビルで死去

② 中学校での勤務

Brownell は，富山県が雇った中学校の最初の外国人英語講師である。富山県尋常中学校には，明治 21 年 11 月～23 年 3 月，約 1 年半の勤務であった。当時の校長の月給

が 60 円の時代に月給 100 円で週 24 時間授業の契約であった。第二期生の桑島虎次郎の回想が残されている（『富中回顧録』，p. 28）。

> 時の校長田中貞吉氏は豪放で派手好みで又運動家でありました。よく校長が率先して城跡内前迄全校生徒と共に駆足をして往復しました。校長は米人プラウネル氏を捜し出して来て本校生徒に会話する機会を与えられました。この為に南日恒太郎，蟹江義丸という英語の達者な勉強家が生まれたのである。（略）プラウネル氏の英語の教授は立派なものでしたが，氏は好色漢で，附けてあつた女中との関係やら又生徒と其女中との関係やらで廃めてしまいました。

授業の評価は高かったが，女性関係に問題があったようである。南日恒太郎（1871–1928）は，1 年次に Brownell に習っている。英文学者として大成し学習院教授等を経て旧制富山高等学校の初代校長を務めた。『英文解釈法』（有朋堂，1905 年）等の受験参考書の著者としても有名である。蟹江義丸（1872–1904）は，カントや孔子の研究者として有名な哲学者で東京高等師範学校教授等を歴任した。

富山県尋常中学校の契約が終わって，Brownell は約半年間（明治 23 年 9 月～24 年 3 月），福井県尋常中学校に勤務した。当時の契約は月給 125 円であった。福井県尋常中学校での授業の様子は管見の限り明らかではない。

③　日本研究

Brownell 研究家の高成玲子氏は，「（Brownell の）日本滞在は，日本に来てみて心密かにジャパノロジストたらんことを決した」（富山八雲会，p. 329）と述べている。

1900 年にニューヨークで『東京からの物語』を出版，それをさらに充実させた『日本人の心』を 1902 年ロンドンで出版した。

また，彼は在英中にロンドンで刊行されていた日英関係の月刊誌『日英新報』（1900 年～1903 年）にたびたび投稿していた。この記事から見えてくるのは，「ジャーナリストとしての冷静な日本理解の深さである」（富山八雲会，p. 338）。

④　知日家としての評価

『日本人の心』は，　2013 年に，高成玲子氏が日本語に訳したものを彼女の死後，富山八雲会が編集し出版した。その「はじめに」によると，1904 年当時，『神国日本』（小泉八雲）に次ぎ人気を博していたということである。さらに，高成は「『日本の心』は版を重ねた。これによってブラウネルはジャパノロジストとして自他ともに認められるようになったと言ってもいいであろう」（富山八雲会，p. 345）とも述べている。

また，東京帝国大学の Basil Hall Chamberlain は，『日本事物誌』の中で，日本に関する十二の代表的な本として Brownell の *The Heart of Japan* を紹介している（富山八雲会，p. 345）。同様にニューヨークタイムズの彼の死亡記事には，「C. L. BROWNELL DIES: STUDENT OF ORIENT」とある（同上）。 日本国内はもちろん，Brownell には，イギリスやアメリカでも東洋通，知日家としての定評があったと言えよう。

⑵ Frank Cary（1888-1973）

① 略　歴

新堀（1984）に掲載されている Otis Cary は，Frank の三男である。Frank の父，兄，息子とも Otis という名前である。Frank の父，Frank，息子の Otis は，同志社との関係が深く，三代にわたって三人が収集した「ケリー文庫」は日本研究の資料として評価が高い。Frank の経歴（『日本キリスト教歴史大事典』p. 489）は以下の通りである。また，北垣（2018, pp. 22-23）も Frank の経歴が詳しいので両者をまとめて略歴とした。さらに北野高校に残されている履歴書の情報も補足した。

表 2　Frank Cary の経歴

1888 年	アメリカで生まれる。
1889(明治 22)年	1 歳の時に来日，少年時代は京都で過ごす。
1898 年	アメリカに戻る。
1899(明治 32)年	1 年半後日本に戻る。
1902 年	シベリア，トルコ，ギリシャ，イタリアを回ってアメリカに戻る。
1911(明治 44)年	アマースト大学卒業後の夏，YMCA 派遣講師として来日，北野中学と天王寺中学に勤務（～13 年）。住友銀行でも週 3 時間英語を教える。帰国してオベリン神学校に入学
1916 年	再来日，東京，札幌，小樽，松山等で布教活動を行う。特に小樽では約 20 年間（1920～1938）宣教活動
1923 年	ハーバード大学大学院（～24 年）
1930 年	小樽中学に勤務（～32 年）
戦時中	フィリピンで在住日本人に宣教，3 年間抑留される。
1946(昭和 21)年	日本に戻り，神戸女学院で教える。同志社の理事
1960 年	アメリカに帰国
1973 年	死去

② 中学校での勤務

1911 年に YMCA 派遣講師として来日，大阪の北野中学［1911. 10. 1～1913. 12］(5) と天王寺中学で 13 年までの 2 年間，英語を教えた。また，小樽中学でも 2 年間［1930-1932］，英語を教えた。

北野中学の学校の記録である『学校日誌』（p. 276）には，「英語教師フランク・ケリー職務勉励ニ付金五円賞与セラル」とあり英語教師としての評価は高かったようである。一方で，小樽中学での勤務に関しては，「上級生に対して会話を教授された」（『湖陵五十年史』，p. 98）とある。一般的に上級生に英会話を教える場合，単なる日常英会話ではなく読み物等の教材を基に議論する場合が考えられる。経験豊かな日本語の堪能な外国人英語講師が担当する可能性もある（保坂，2014）。

③　日本研究

父の Otis Cary から譲られ，Frank さらには息子の Otis Cary，三代にわたって収集した日本関係資料は同志社大学に保存されている。それは，「ケリー文庫として，内外の研究者の利用に供されている」（『来日西洋人名事典』，p. 130）。Frank 自身も *A History of Christianity in Japan*（1960）を著している。

④　「知日家」としての評価

Frank は，日本関係の特に外国人の日本研究やキリスト教伝道史に関する史料の収集者としての評価は高い。*A History of Christianity in Japan*（1909）を著した父 Otis Cary（1851-1932）は，「同志社大学の教育に大きな影響をもたらした」（北垣，2008）。この本は，「キリスト教史家としての畢竟の作品であり，現在に至ってもまだこの本を凌駕するものが出ていない」（北垣，2008, p. 124）。

北垣（2008）は，3 人の Otis Cary をそれぞれ Otis1, Otis2, Otis3 と区別しそれぞれの経歴を以下の通り簡潔にまとめている。

Otis1（1804-1888）

ボストンの実業家，議員，弟 Austin（1807-1849）がアマースト大学入学，牧師

Otis2（1851-1932）

『日本における基督教の歴史』（1909）を著す。

Otis3（1921-2006）

小樽生れ，終戦後再来日，同志社大学教授，『日本開眼』（1952），『アジアの荒地から』（1952）の著者である。1941 年にアメリカ海軍日本語学校に入学。ドナルド・キーンは同級生。

Frank は，Otis1 の息子で Otis2 の弟である。また，Otis3 は Frank の三男である。本研究では中学校に勤務した外国人英語講師の日本研究を対象としているが，知日家一家である Cary 家と日本研究とまとめるのが妥当なのかもしれない。

1960 年日米修好通商百年を記念して組織された記念行事運営委員会は，Otis2 と Otis3 を宗教・教育関係の功労者として表彰した（重久，1987，p. 130）。

⑶ Harper Havelock Coats（1865-1934）

① 略　歴

Coats の経歴は，『来日メソジスト宣教師事典』（p. 49）が詳しい。また，青山学院に残されている履歴書で若干補足し，The United Church of Canada Archive で確認しまとめたものが以下の表 3 である。

表 3　Coats の経歴

1865 年	カナダ，オンタリオ州生れ
1885 年	ヴィクトリア大学卒
1890 年	ヴィクトリア大学修士課程卒。イビー自給宣教団の一員として 9 月に来日
1890（明治 23）年	三重県尋常中学校及び三重県師範学校に勤務（～1891 年 7 月）
1891 年	同志社に勤務，北陸学院（金沢市）に勤務
1892 年	東京英和学校に勤務（～1893 年）
1893 年	本郷中央教会で伝道（～1904 年）
1904 年	青山学院神学部勤務（～1914 年頃）
1916（大正 5）年	浜松に在住（～1930 年）
1930（昭和 5）年	カナダに帰国（～1931 年）
1931 年	来日，金沢に移動（～1934 年）
1934 年	名古屋に移動，肺炎で死去

② 中学校での勤務[6]

最初に勤務した三重県尋常中学校では，「クーツはまじめなクリスチャン。クーツが読む英文を書きとる場合など，スペルのまちがいに線が引かれて答案が返されるだけだった。日本語を全然知らないので，授業はむずかしく自習時間みたいだった」（記念誌「あ，母校」編集委員会，p. 85）との回想が残されている。

静岡県では，浜松中（大正 10 年 7 月～昭和 5 年 7 月），掛川中（大正 10 年 7 月～昭和 5 年 6 月），見附中，榛原中（大正 10 年 8 月～11 年 9 月）に勤務した。静岡県内の授業に関しての回想は残されていない。

③ 日本研究

Coats は，来日した当時は日本語が全くできなかったらしい。しかしながら，④で詳述するが仏教研究者，特に法然の研究者としての業績は高く評価されている。

④　知日家としての評価

『法然上人行状絵図』では，英語版への歴史的序説，解説的及び評論的注釈を書き，高い評価を受け，「この分野における彼の学識により非常に尊敬され，死後東京において仏教による追悼式が催される」(『来日メソジスト宣教師事典』，p. 49)。

The United Church of Canada Archive には，Coats の評価に関して以下の様に書かれている。

> He was an expert in Japanese language and customs. He had a special interest in Buddhism, and he co-authored a major study of Honen, a Buddhist reformer.

同様にイギリスの外交官で日本史研究者の George Sansom（1883-1965）は，「One of the most useful works Bushism works in Japan is a copiously annotated life of Honen by Coats and Ishizuka」(Norman and Norman, p. 392）と高く評価している。

⑷　Richard Arthur Brabazon Ponsonby-Fane（1878-1937）

Ponsonby は，京都一中で英語を教えながら，日本の皇室研究，神道研究を行ったイギリス人である。

①　略　　歴

Ponsonby の経歴は保坂（2014, p. 17）を参照した。

表 4　Ponsonby の経歴

1879 年 1 月 8 日	ロンドンで出生
1891 年	ハロー校に入学，病気で退学（～94 年 7 月）
1896 年10月	ナタール総督の私設秘書になる（～97 年 6 月)。
1901 年 8 月	健康を害し香港及び日本を訪問
1915 年12月	香港総督の私設秘書になる。
1919(大正 8)年	成蹊学園で英語を教える。
1924 年11月	帰英後，京都へ移動
1925 年 4 月	京都一中で英語を教える。
1937 年12月10日	死亡

「保養先の香港大学で優秀な日本人学生に出会う。早速，Ponsonby は二人の学生に

出身を聞くと成蹊学園と答える」（保坂，2014，p. 6）。そこで，Ponsonby は成蹊学園の中村春二校長に会いに行き無給で英語を教えることにした。

②　中学校での勤務

Ponsonby の京都一中での勤務は，極めて不規則である（同上）。

> 京都中学へは，大正 14 年に赴任，昭和 2，4，6，8 年と 5 年間に亘って英語を教えた。京都中学でも無給で教えた。授業は 4 月から 11 月までで，冬は香港で避寒した。京都に移り住んだ Ponsonby は，京都で日本の歴史研究（主に神道研究）をしながら京都中学で英語を教えていた。

京都に移ったのも授業が変則的だったのも日本の歴史研究が優先されたためであった。しかしながら，発音の重視した彼の授業は評判で多くの生徒の回想が残されている。一方で，受験には弱いというジンクスがあったらしい。詳細は保坂（2014）を参照のこと。

③　日本研究

Ponsonby が勤務した京都一中の当時の校長山本安之助によると Ponsonby の来日の経緯には香港大学で出会った以外に以下の三点も考えられるという（山本，p. 2）。

> 幼少の頃から父母に連れられて度々外遊したので，海を愛するようになった。（略）英国人先輩が，明治初年以来，日本に来て各方面の研究をなし，それを発表している中の古事記や日本書紀を原書で読みたいという点にあったと記憶している。親戚が「Tales of Old Japan」の著者で有名なエー・ビー・シツド・フォード(ママ)氏。

筆者の研究では，Ponsonby と A. B. Mitford（1837–1916）との親戚関係は確認できていないが，両親や親戚，知人等から日本へのあこがれが幼少のころから醸成され，香港大学での日本人学生との出会いがひきがねとなって Ponsonby に日本への移住，永住を決意させたと考えられる。

Ponsonby は，「日英同盟の促進と実現に友人に手紙を送って努力したらしい」（大谷登，日本郵船会社元社長の回想）（山本，p. 122）との証言も残されている。

④　知日家としての評価

Ponsonby は英語教師と言うよりも皇室研究・神道研究家として有名である。彼の研究に関して，大谷大学の徳重浅吉は以下の 4 点にまとめている（佐藤，pp. 114–123）。

- 一生の中心生命を日本神社の研究に捧げた。
- 研究の発端は，日本帝国及びその国民社会に対する好奇心である。氏の学問は神社の個別研究に最も力を注いだが，この究極は日本文化の理解とその文化的意義の発見にあった。
- 神社研究は神道研究に帰納した。精細に，確実に，周密に，正直に，科学的に行った。神道は宗教なりという立場を堅持した。
- 本心の奥底から自然に醸し出されて来た学問研究の態度であった。そしてかかる人のみが真に日本の国体を認識し，その精神の発現する過程なりし国史を正しく理解することができた。

彼の研究業績は山本（1938）の「本尊美翁著作論考年表」（pp. 37–54）が詳しいので参照して欲しい。また，彼の没後，約 10 年間に亘り，秘書の佐藤が編纂した『本尊美博士著作選集』（全 6 巻）がある。

Ponsonby の研究は本国，イギリスでも高く評価され，論文 *The Vicissitudes of Shinto* は，王立人類学研究所の雑誌に掲載された（1931 年）。

⑸ William N. Porter（1863– ?）

Porter は英国人，オックスフォード大学で日本語研究を行う。来日前に，土佐日記や徒然草の英訳をすでに行っていた。

① 略　歴

保坂（2022）に上村（2005）の情報を追加し Porter の経歴とした。

表 5　Porter の経歴

1863 年 1 月 12 日	アイルランドのウェリントン生れ
1886 年	モーブラ・カレッジを卒業
	ベルファースト海軍造船所で修行（～1891 年）
1891 年～1901 年	英米で造船製図技師として働く。
1901 年～1908 年	リヴァプールで造船図案関係の会社経営
1908 年	オックスフォード大学で日本語研究を行う。土佐日記や徒然草の英訳を行う。
1915(大正 4)年	第二神戸中学校に勤務（～大正 5 年 8 月）
1916 年 8 月	第五高等学校に勤務（～1925 3 月）

熊本大学五高記念館に確認したが，Porter の帰国後に関しては退官後の記録は不明である。

② 中学校での勤務

筆者が確認できたのは，第二神戸中学校（現在の兵庫高校）に勤務していたということである。当時の生徒の回想等は残されていない。

③ 日本研究

上村（2005）には，Porter の日本関係訳書が記されておりそれを表 6 にまとめた（p. 163）。

表 6　Porter の翻訳一覧

1909 年	百人一首の英訳をクラレンドル版にて発行
1911 年	発句集英訳 *A Year of Japanese Epigrams* をオックスフォード大学出版より出版
1912 年	『土佐日記』の翻訳をロンドンのヘンリー・フラウド社より出版
1914 年	徒然草の英訳，The Miscellany of Japanese Priest をロンドンのヘンリー・ミルフォード社より出版

来日する前にイギリスのオックスフォード大学で日本語を学び日本文化を研究した。イギリス在住当時にすでに古典（『百人一首』，『土佐日記』と『徒然草』）の翻訳を精力的にやっている。

④ 知日家としての評価

アジア関係の出版で有名な Tuttle 社は，1979 年，Porter の百人一首の英訳の復刻を行った。その奥付で，「He is best known for his challenging but artful translation of *A Hundred Verses from Old Japan*」と述べ，その翻訳を高く評価している。同様に，この翻訳はその後の翻訳のお手本となるもので以下の様に高く評価している。

> Mr. Porter's translation is truly a labor of love, and the fact that several other English translations of the work have appeared in later years in no way diminishes the value of his accomplishment.

日本の古典翻訳の評価が高いということは，彼の日本語に対するしかも古文に対する深い知識はもちろんであるが，当時の日本文化・歴史に対する深い知識が前提であることは言うまでもない。Porter が五高を去る時に多くの日本研究関係書を残した。ポータ文庫として熊本大学に保存されているがその内容の詳細は國津（2018）を参照のこと。

⑹ Glenn William Shaw（1886-1961）

Shaw は，倉田百三の『出家とその弟子』等の日本文学の翻訳者として有名である。Shaw の経歴は以下の通りである。

① 略　歴

Shaw の略歴に関しては，『来日西洋人名事典』（pp. 184-185）を参照に以下の表 7 にまとめた。

表 7　Shaw の経歴

1886 年11月19日	米国ロサンジェルス生まれ
1910 年	コロラド大学を卒業
1916(大正 5)年	YMCA の斡旋で来日，日本国内で英語教員
1940 年	戦争のため帰国
1957 年	戦後来日，アメリカ大使館に勤務後米国に帰国
1961 年	コロラド州で永眠

在日，約 40 年の経歴は，②の中学校での勤務で詳細を述べることにする。

② 中学校での勤務

Shaw の中学校等の英語講師としての勤務は以下のとおりである。

表 8　Shaw が勤務した学校

1916(大正 5)年	来日，大阪高等商業学校，今宮中学，市岡中学に勤務（～1917 年 10 月）
1917 年	神戸高等商業学校にも勤務
1918 年	山口高等商業学校に勤務（～1923 年）
1924 年	大阪外国語学校（～1939 年），和歌山高等商業学校に勤務

中学校での勤務で唯一回想が残されているのは，大正 10 年に市岡中学を卒業し後に広島大学教授になった小川二郎（1904 年～1981）の回想である（小酒井，p. 11）。

> 私が先生に英語を習ったのは，中学二年生のときで，洋服の上着を脱いだり着たりの実演をしながら，take off, put on の語法を学び，両腕を万歳せずに，片腕ずつ静かにするりと，上着は着るものであるということも学んだ。

同様に彼の著，*OSAKA SKETCHES*（日本語訳『浪華の足』）には，彼が教えていた市岡中学の生徒に対しての回想が残されている。5年生は受験に関心が高く外国人英語講師の授業には余り興味を示さなかった。一方で，1，2年生が教えるに適していると言い，「Here was enthusiasm. Nobody was tired yet. Everybody was a success.」（p. 245）と述べている。その他，関西大学，大阪商大，大阪女専でも教えた。大学，専門学校での勤務は藤本（2008，p. 109）が詳しい。

③　日本研究

Shaw の日本研究は主に翻訳である。「紅蓮尚」という名前で数多くの日本文学の翻訳[7] を行った。その年代順のリストを速川（2004）が作成し分析している。

表 9　Shaw の日本研究リスト

翻訳出版年	英　訳　名	原作名（著作名）
1922 年	*THE FIRST AND HIS DISCIPLES*	『出家とその弟子』（倉田百三）
1922 年	*SHIN WIRO*	『新外郎』（奈倉次郎）
1925 年	*Tojuro's Love And Four Other Plays*	『藤十郎の恋』（菊池寛）
1907 年（ママ）	*MEDIOCRICY*	『平凡』（二葉亭四迷）
1929 年	*OSAKA SKETCHES*	
1932 年	*JAPANESE SCRAP-BOOK*	
1935 年	*Three Plays*	『坂崎出羽守』（山本有三）他

Shaw は山口高等商業学校勤務時の同僚であった奈倉次郎の協力を得て日本文学の翻訳や日本文化の紹介を行った。奈倉次郎（1871–1947）は，山口高等商業学校に勤務していた時［1907–1932］に Shaw に出会った。彼自身も英文学者として『アーサー王物語』等の多くの翻訳を残している。

Shaw の『出家とその弟子』の翻訳に関して，「実に氏の翻訳は和文英訳の模範として天下一品と称すべきものである」（『英語青年』第四十七巻，九号）と評価は極めて高い。

また，「グレンショー講師は，紅連尚と日本名を達筆で黒板に書く日本通，俳句をよくした」（『有恒会百年史（1890〜1990）』，p. 214）という記録も残されている。

④　知日家としての評価

Shaw は，開戦後一時アメリカに帰国したが，終戦後再び来日しアメリカ大使館に勤務した。「帰国に際し多年にわたる功績により日本政府から勲三等瑞宝章を贈られた」（『来日西洋人名事典』，p. 185）。

『英語青年』（第四十七巻第九号）には，「著者ショー氏がよく日本文を読み，よく日本を研究し，よく日本を理解し，其の批評眼の非凡にして其行文の清新軽妙優に一家をなせるは既に定評あり」とあり，「日本文学を海外へ紹介したパイオニアの一人」（『英語青年』第百三巻第七号，p. 361）としての評価は高いと思われる。

⑺　William Merrell Vories（1880–1964）

Vories は，近江八幡 YMCA 会館や関西学院の校舎などを設計した建築家，メンソレータムを日本に普及させた事業家として有名であるが，もともとは YMCA 派遣の英語講師であった。

①　略　　歴

彼の略歴は，本人の自伝，一柳（1970）を参考に以下のようにまとめた。

表 10　Vories の経歴

1880 年10月28日	米国カンザス州生れ
1900 年	コロラド大学入学，YMCA に関心を持つ。
1904 年	コロラド大学卒業
1905（明治 38）年	滋賀県立商業学校に赴任
1907 年 3 月25日	伝道活動のため教師解雇
1908 年	ヴォリス建設事務所を開設
1919 年	一柳満喜子と結婚
1920 年	メンソレータムの販売
1941 年	日本国籍，一柳米来留（ひとつやなぎめりる）と改名
1964（昭和 39）年 5 月 7 日	召天

最初はキリスト教の伝道者として来日し，滋賀県立商業学校等で英語を教えながら布教活動を行っていた。赴任当初の校長は Vories に寛容であったが，次の校長が保守的な仏教徒であり辞職を勧奨された。詳細は後述とする。その後，本人が若い時の夢であった建築家になった。さらに病気療養のための帰米中にメンソレータム社の創業者に再会し日本の代理店を開いた。日本人の一柳満喜子と結婚，帰化し日本に永住することにした。そのころの事情は奥村（2005）が詳しい。

②　中学校での勤務

英語講師としての勤務は下記の通りわずか 2 年間であった。この 2 年間に，八幡商業学校，滋賀県立彦根中学校，滋賀県立第二中学校，京都府第一商業学校にも勤務した。

中学校での回想はないが同じ中等教育機関である商業学校での回想が残されている。

八幡商業学校の当時の校長は，「名校長として高かった」（『八商百年史』，p. 71）安場禎次郎（1871-1948）［1903. 2. 27-1906. 6. 17］であった。彼は，大阪尋常中学校（明治 21 年 7 月卒）や高等商業学校（明治 28 年 7 月卒）で在学中に外国人英語講師の授業を受けており，「安場先生の（略）毅然たるヴォリス氏への好意は，町の人々への無理解を反省せしめるに有効であり，町の人々を啓蒙するに充分であつた」（『安場禎一郎先生小伝』，p. 92）。「先生が洗練された英語で話された。（略）安場先生は，米国人であり教師の経験にも乏しく，また外国在住にも馴れていない私[8] に対して極めて親しくお交じ下さつた」（『安場禎一郎先生小伝』，p. 87）。

彼が明治 39 年に長崎商業学校校長に転任すると，12 代校長として，伊香賀矢六［1906. 6. 18-1912. 3. 27］が赴任した。「後任校長が保守的な且つ仏教徒であつたためか，ヴォリス氏に強い風を向け，ヴォリス氏もまたその自己の信念を曲げずして，辞職となつた」（『八商百年史』，p. 93）。

授業での Vories の評判は良かったようである。

> ヴォーリズは毎学期毎に四〜五回ずつ，授業中つけたと思われる 9，8，9 3/4 等といった点数をその手帳に控えており，期末の登録点数には読方，会話など項目別に 90，97．86，といった素点を記入していたが，全般的に点のつけ方が奨励的であることは否めない（略）。
>
> ヴォーリズの授業方法は，単なる講義法ではなく，例えば本国から持参した写真機を教室に持込んで生徒たちを投影し，写真機について話題にするといった実物教育，即物教育によって英語を学ばせた。また生徒たちを向い合わせて二組に分け，単語の綴り競争（spelling match）を試みるなどの工夫」（『キリスト教社会問題研究』第三三号，p. 97）。

生徒にやる気を起こさせる授業を行っていた。

Vories の教え子で彼の紹介で留学し帰国後英語の教員になったのが宮本文太郎である。彼は，「八商卒業後，直ちに母校の英語の先生になり，後にヴォーリズ氏の斡旋でアメリカで勉強」（『八商　創立 80 周年記念』，p. 92）し，「あちら仕込みの流暢な発音でナショナルリーダーを習った」（同上）と生徒が回想している。

③　日本研究

Vories は，今まで述べてきた日本文学の翻訳家，日本文化の研究者ではない。ただ，英語を教えながら布教する目的で来日し日本で生活する中で日本を愛するようになった。

そして日本人と結婚し日本に帰化した。

Vories は，日本に帰化した理由を「ただ，『日本を愛するから』という一言に尽きる」（奥村，p. 223）。そして，「なぜ帰化する必要があるのかについて，愛は他から受けるだけではなくお返しすべきもので，一体何を日本に差し上げるかと言えば，私しかないというわけである」（同上）と述べている。

④　知日家としての評価

戦後の混乱期に日本を救ったと言われる以下の様なエピソードが残されている（『失敗者の自伝』，p. 4）。

> 熱心に奔走された近衛公に，極秘の内に用いられ，単独マッカーサー元帥の横浜キャンプに，差し向かい，天皇は，この戦争には責任はないこと，天皇ご自身は，自分を神とひとしいとは考えてはおられないことなどを証明し，その結果，元帥の信頼を受け，これらを信じてもらい，天皇に対する敬意を，高くするご用を果たしました。

Vories 本人の日記であるから内容の信憑性は高いと思われる。日本国民としては，感謝してもしきれない Vories の行為であった。

6. お わ り に

新堀（1986）は，知日家の特徴を 4 類型に分けている（p. 16）。社会的影響力の大小，知識の大小による類型である。本研究では，その 4 類型に当てはめることは困難であると判断してそれを参考に以下の点で上記の 7 人の外国人英語講師を整理してみた。

⑴　来日の経緯

①　YMCA による派遣：Frank Cary，Shaw，Vories
②　宗教活動：Coats（イビー自給宣教団の一員）
③　日本研究を主として英語教授：Porter（来日前に日本研究）
④　その他：Brownell（世界歴訪のついで），Ponsonby（香港での日本人学生との出会い）

⑵　在日年数

①　10 年未満：Brownell（5 年）

② 10 年以上：Frank Cary（度々帰国のため詳細は不明だが最低 10 年以上は確実である），Coats（約 40 年），Ponsonby（約 18 年），Porter（約 10 年），Shaw（約 40 年），Vories（約 60 年）

⑶ 日本研究の分野

① 日本文学：Porter（古典翻訳），Shaw（日本文学の翻訳）
② 日本文化：Coats（仏教研究），Ponsonby（神道，皇室研究）
③ 海外への日本紹介：Brownell
④ その他：Frank Cary（日本関係の史料収集），Vories

事例が十分でないので一般化するのは難しいが，以下のようにまとめることができそうである

① YMCA による派遣がきっかけで日本に興味を持ち日本研究を始めることになった外国人英語講師がいる。
② 日本研究者のほとんどは，10 年以上の滞在である。
③ 外国人英語講師にとって興味関心の中心は，日本文学や仏教等の宗教である。

それは彼らの多くがクリスチャンとしてキリスト教の布教にも関係していたからのように思われる。

今後の研究課題としては以下の点が考えられる。

⑴ 東日本に勤務した外国人英語講師の日本研究の状況を調査する。
⑵ 外国人英語講師の中学生への影響を調査する。

課題⑵に関しては，立命館大学の戦後最初の総長になった末川博（1892–1977）が挙げられる。彼は，当初は軍国少年であった。5 年生の時に教頭のすすめで外国人英語講師の自宅に下宿することになった。その 1 年間の生活を経て，後に「平和と民主主義」を体現する民法学者になった。その様子を当時の外国人英語講師，Leland が日記に記しておりそれが Yale 大学に残されている。末川と Leland との交流の詳細は，保坂（2012）を参照のこと。彼のような中学生は他にもたくさん存在するように思われる。今後の課題としたい。

謝辞

本研究は，令和 4 年度の拓殖大学人文科学研究所の援助を受けたことを記しておきたい。多岐にわたる資料収集において財政的な援助は大変助かった。誠にありがとうございました。

《注》

（1） 小泉八雲関係の研究会としては管見の限り，松江を本拠地とする八雲会，富山大学ヘルン研究会，熊本大学八雲研究会を初め日本英学史学会，日本英語教育史学会等で研究が行われ

ている。

（2） 保坂（2014）では，大正14年〜昭和8年まで京都一中に勤務しながら，神道研究家としての研究を極めて王立人類学研究所の雑誌に掲載されるなど日本研究者として活躍した外国人教師がいたことを明らかにした。詳細は後述とする。

（3） 多くの宣教師は教会の都合で移動となる場合は多い。日本中移動する場合も少なくない。本研究の副題は，「西日本地方勤務経験者を対象にして」であるが，厳密には一度は西日本の中学校に勤務した経験のある外国人英語教師を研究対象としたという意味である。続編では，東日本の中学校に勤務した外国人講師を研究対象とする予定である。これは厳密には東日本のみの中学校に勤務した外国人講師ということである。数が多いので便宜上このように分類させて頂いた。

（4） 松本（1977）によれば，Brownellは，「明治二二年になると彼は金沢中学へ移っていた」（p. 95）とあるが，筆者の調査では，当時金沢にあった共立尋常中学校のことであると考えられる。この学校を経てBrownellは，明治23年9月，富山県尋常中学校に勤務した。この情報は，北陸学院資料編纂室に依るものである。また，松本（1977）によると，Brownellは，通信教育学校である東京学館にも所属していたようである（p. 94）。

（5） 北野中学［1911. 10. 1〜1913. 12］とあるのは，北野中学に1911年10月1日〜1913年12月，勤務したということである。

（6） Coatsは，青山学院神学部や静岡県内の各中学校で長く勤務したが，三重県尋常中学校や同志社，北陸学院にも勤務したので本研究の対象とした。

（7） 速川（2004）では，『平凡』（二葉亭四迷）の英訳は1907年とあるが，1927年の間違いであろう。『浪華の足』（1929）や『日本雑草記』（1932）は，日本文学の翻訳ではなくShawによる日本に関するエッセィであるが日本研究の成果としてリストに掲載した。

（8） ここで「私」というのはVoriesのことである。

参考文献

上村直己（2005）.「附録　第五高等学校外国人教師履歴」『九州の日独文化交流人物誌』熊本大学文学部地域科学科発行，pp. 147-171.

梅渓昇（2010）.『お雇い外国人の研究』上，青史出版.

大倉商業学校如蘭会（編）（1949）.『安場禎一郎先生小伝』大倉商業学校如蘭会.

大阪府立北野高等学校校史編纂委員会（編）（1969）.『学校日誌』（明治六年〜四十四年）非売品.

奥村直彦（2005）.『ヴォーリズ評伝』港の人.

北垣宗治（2008）.「オーティス・ケーリの自伝」『キリスト教社会問題研究』第56巻，同志社大大学人文科学研究所，pp. 103-125.

北垣宗治（2018）.「オーティス・ケーリの生涯」晃洋書房.

記念誌「あ，母校」編集委員会（編）（1980）.『あ，母校三重県立津高等学校創立100年記念誌』三重県立津高等学校.

國津道雄（2018）.「ポーター文庫について」『日本英学史学会九州支部発足40周年記念論文集録』日本英学史学会九州支部，pp. 34-41.

小酒井益蔵（編）（1957）.『英語青年』第百三巻第七号，研究社.

潮陵高等学校創立五十周年記念協賛会（編）（1953）.『潮陵五十年史』記念事業協賛会.

佐藤芳二郎（編）（1958）.『ポンソンビ博士の真面目』本尊美記念会発行.

三省堂編集所（編）（1989）.『コンサイス日本地名事典』（第3版），三省堂.

滋賀県立八幡商業高等学校創立80周年記念誌編集委員会（編）（1966）.『八商　創立80周年記念』滋賀県立八幡商業高等学校創立80周年記念誌編集委員会.

重久篤太郎（1987）.『明治文化と西洋人』思文閣.
ジャン・W. クランメル（編）（1996）.『来日メソジスト宣教師事典〈1873-1993 年〉』教文館.
新堀通也（1984）.『知日家人名辞典』有信堂.
新堀通也（1986）.『知日家の誕生』東信堂.
高成玲子（2004）.「ロンドンのブラウネル」『東日本英学史研究』第 3 号，pp. 53-59.
武内博（編）（1983）.『来日西洋人事典』日外アソシエーツ.
武信由太郎（編）（1922）.『英語青年』第四十七巻第九号，英語青年社.
同志社大学人文科学研究所（編）（1985）.『キリスト教社会問題研究』第三三号，同志社大学人文科学研究所.
富山県立富山中学校同窓会（編）（1950）.『富中回顧録』富山県立富山中学校同窓会発行.
富山高等学校創立百周年記念事業後援会（編）（1985）.『富中富高百年史』非売品.
富山八雲会（編）（2013）.『日本の心　アメリカ青年が見た明治の日本』富山八雲会.
中村赳（1964）.「御雇外国人の研究 ── とくに数の考察」『法政史学』第十六号，pp. 65-75.
日本キリスト教歴史大事典編集委員会（編）（1988）.『日本キリスト教歴史大事典』教文館.
「八商百年史」編集委員会（編）（1986）.『八商百年史』八商創立百周年記念事業実行委員会発行.
速川和男（2004）.「翻訳者としての Glenn W. Shaw」『東日本英学史研究』3, 10-18.
一柳米来留（1970）.『失敗者の自叙伝』近江兄弟社湖声社.
藤本周一（2008）.「戦前昭和期に大阪府下の学校等（旧学制）に勤務した外国人教師について（その 3・完）」『大阪経大論集』第 59 巻第 1 号，pp. 101-115.
保坂芳男（2012）.「H. D. Leland に関する研究：岩国中学での教育活動を中心に」『日本英語教育史研究』，第 27 号，pp. 31-49.
保坂芳男（2014）.「京都中学の外国人英語教師に関する研究：R. Ponsonby を中心に」『人文・自然・人間科学研究』，No. 31，pp. 1-18.
保坂芳男（2017）.「豊浦中学の英語教育に関する研究 ── 外国人教師に焦点を当てて」『人文・自然・人間科学研究』第 37 号，pp. 75-90.
保坂芳男（2022）.「西日本の旧制中学校に勤務した外国人講師の日本研究」第 85 回日本英学史学会中国・四国支部例会発表資料.
松本康正（1977）.「東京専門学校で教えた一六人の外国人講師たち」『早稲田大学史紀要』（10），pp. 89-114.
山本安之助（編）（1938）.『本尊美利茶翁略伝』本尊美追懐録編纂刊行会発行.
有恒会百年史編集委員会（編）（1990）.『有恒会百年史（1890～1990）』有恒会.
Norman, G. R. P. & Norman, H. (1981). *One hundred years in Japan, 1873-1973.* The Division of World Outreach, United Church of Canada.
Porter, W. N. (1979). *A Hundred Verses from Old Japan.* Tuttle Publishing.
Shaw, W. G. (1929). *Osaka Sketches.* 北星堂書店.
The United Church of Canada Archive. Retrieved from https://catalogue.unitedchurch archives.ca/tsu-japan

（原稿受付　2023 年 10 月 24 日）